

奉寄
註解改正月令博考
六月部
三





六月部目錄

△印あり能楷の季と持物

○穀養生の法○感雨の考○米の豊凶
○妙業の方其外人家聖法の支も
如々よある少人目錄よあるを

育

卦 月支 調子
陰陽生 異名
六丁

△小暑節

六丁 △大暑中 六丁

日令

此部は六月日の定りし
支支の定りし事とある

△永室

△氷餅 六丁 △忌日の御飯供 六丁

△献醴酒

六丁 △一夜酒 六丁

△勝曼祭

六丁 △富士詣 六丁

△六月會

六丁 △天取節 六丁

△祇園會

六丁 △水貯 六丁

△山鉾

△山鉾 六丁

- △舟舩△笠舩△岩倉△白出山△五葉山
- △郭巨山△琴破山△鶴脚山△白樂天山
- △太子山△木賊刈山△昔刈山△山伏山
- △花盗入山△天神山△鷄蹄



日九十		日七十		日六十		日五十	
△稻荷祭	△鞍馬竹切	△賀茂屋洗祭	△内宮御祭礼	△相國寺園藝法	△志渡寺奉	○袖直	△嘉祥祝
△座摩御祭	△上難波御祭	△糸涼	△巖嶋祭	△御冥真神祭	△博多祭	△外宮御祭礼	△富士雪解
△月次祭	△解斎御祭	△竹生嶋祭	△芦御真	△祇園臨時祭	△熱田祭	△江戸山王祭	△神令食
△御射御占	△祇園會	△津嶋祭	△祇園會	△神令食	△御射御占	△御射御占	△御射御占

△愛宕千日詣	△天橋立祭	△水無月能	△小鯉さき神	△上賀茂水無月能	△唐崎千日詣	△月令	△土用干	△雷鳴の陣	△夏節	△浚井
△天満天神御祭	△節拍	△鎮花祭	△茅の輪	△住吉御祭		此部より六月一日の 定まらざる度とあり	△施茶	△香薫散	△覆乱	△三伏
△道徳祭	△水無月能	△水無月能	△水無月能	△水無月能	△水無月能		△川社	△川社	△川社	△川社

六月 目録 二

九夏三伏	六	○萬鬼行	六
△水掛合	六	△竹婦人	六
△籠抗	六	○漆取	六
△鴛鴨涼し	六	△船遊	六
△汗流	六	△白袋	六
△草	六	△泉	六
△清水	六	△海殿	六
△雲峯	六		
時令	此部より六月一ヶ月の時 候に於る事とす		
○土用	六	△夕立	六
△露涼し	六	△夏露	六
△風薫	六	△青嵐	六
△暑	六	△日盛	六
訪暑状	六	同報答	六

△涼	六	△納涼	六
△晚夏	六	△秋近	六
△百日紅	六	△苧麻刈	六
△麻	六	△苧麻	六
△綿の花	六	竹皮散	六
△烏扇	六	△玉簪花	六
△釣鐘草	六	△麒麟草	六
○馬鞭草	六	○猫見眼暗草	六
△剪春羅	六	△虎尾	六
△昼負	六	△夕負	六
△狐	六	△南陸花	六
山慈姑	六	△鷺州	六

草木

此部より六月一ヶ月の
草木の類とあつむ

△蒲穂	△緑豆	△赤草	△河骨	△蓮花	△荷葉	△金蘭刈	△菅刈	△薔茂	△田草取	△林檎実	△青鬼燈	△藜荷子	△凡蘭
六丁	六丁	六丁	六丁	六丁 <small>△白蓮 △紅蓮 △水芝 △池之草 △あじさい</small>	六丁	六丁	六丁	六丁	六丁	六丁	六丁	六丁	六丁
△蘿摩	△芡実	△慈姑	△菱花	△金蘭の花	△席草	△藍	△青田	△青田	△芦茂	△早桃	△青蕃椒	△凌霄花	△汐見坂
六丁	六丁	六丁	六丁	六丁	六丁	六丁	六丁	六丁	六丁	六丁	六丁	六丁	六丁

△神馬藻	△豇豆	△甜瓜	△白梵天	△熟瓜	△南瓜	△阿古陀瓜	△紫蘇	△胡荽	△夏切茶
六丁	六丁 <small>△小角豆 △青豆 △十八さび</small>	六丁	六丁	六丁	六丁	六丁	六丁	六丁	六丁
△瓜	△瓜皮	△干瓜	△菜瓜	△南瓜	△栝花	△蒜根	△蒜根	△蒜根	△蒜根
六丁	六丁	六丁	六丁	六丁	六丁	六丁	六丁	六丁	六丁

種植

種く。種まき。水とよく。さ。六丁

生類

此部より六月一ヶ月のいき物とあり。六丁

△燈蛾	△蟬脱	△空蟬
六丁	六丁	六丁

△夏虫	△残蠅
△金龜子	△鳥毛虫
△練雲雀	△蝸蝓
△鶴鷹	△藍雲雀
△川狩	△鯖釣
△海月丸	

必用

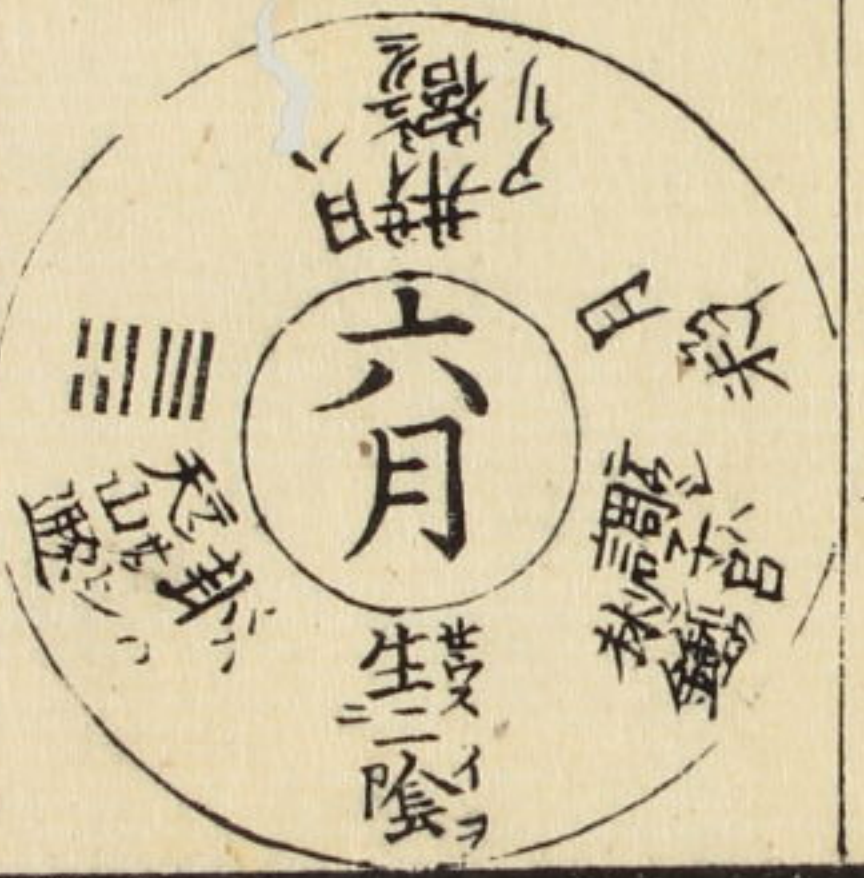
此部六風雨占日取の也
也料理献其外重法の事之記

△養飯	△瀧繪	△糲飯	△冷索麵	△醬油造	△豆仕込	△奈良漬製	△水の粉
△飯	△飯	△飯	△麵	△油	△豆	△漬	△粉
△飯	△繪	△飯	△麵	△造	△仕	△製	△粉
△飯	△繪	△飯	△麵	△造	△仕	△製	△粉

六月之部

△印ある能諧の
季と持りの

此時陽氣
盛なり其
時今も隨
ひて仁慈と
行幸し



異名

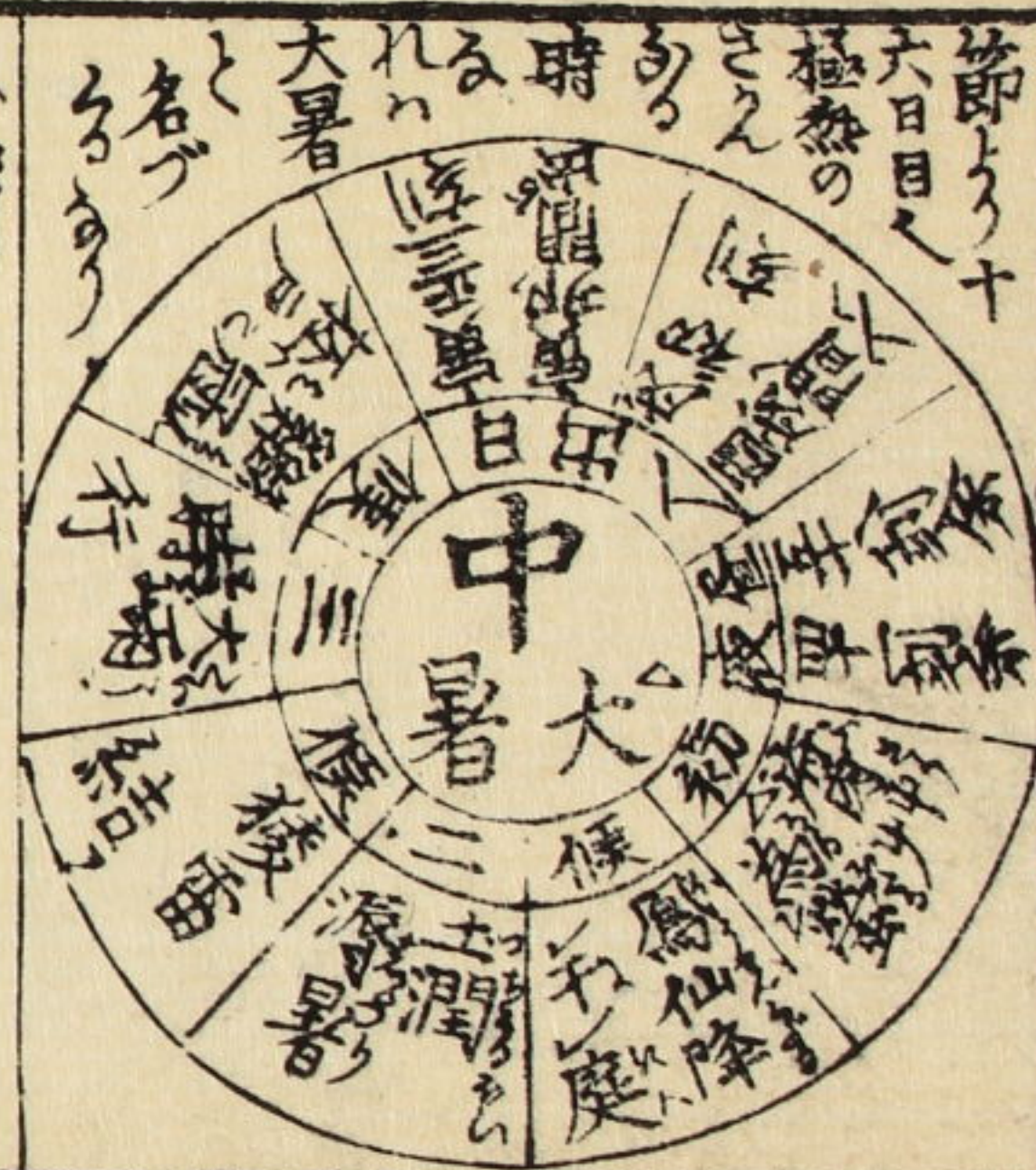
△睦月 △朔月 △陽水 △庚伏
○九陽 △季夏 晩夏 徂夏

異名註

△且月ハル雅 六月と
且と云と云

礼記に出○陽水是詳なり疑ら
くハ陽水の誤なり。庚伏六月ハ
火旺メ金火と畏る庚日心も伏せ
しう依て名とす。六陽ハ早と云
○季夏ハ季ノ夏也。晩夏抑れ
る夏といふと云。徂夏ハゆく夏之

中大暑。廿二候。卯木廿二候。昼夜長短。日の出入等左記ス。



節より十日。極熱の候。大暑。卯木。廿二候。螢を生ぐ。もろこし。本朝。おのち夏が盛ん。和漢少く。時候のちういあうものなるべし。

○此時土用されば土潤ふ。苦き。もろこし。火の盛ん。もろこし。を。らまて暑さ甚し。雨も此土用の。湿氣を陽氣のさかん。なるべし。のりて大雨と降る。鳳仙。の鳳仙花の種と蒔く。鶏冠。

日令

此部は六月日の定りたる事。の定りたる。祀の祭の所。は。概し。大抵祭と同じ。

湖天氣

風雨あれい米價貴し。西南の風い。主る。

○日蝕あり。氷室の氷い。四月朔日。

氷室

九月盡まで献ぐるもの。今日と擧ぐ。此時御膳み水と奉る。その。仁徳。天皇六十二年。額田の王子狩。出。氷室を見て土人。問。た。土を。一丈余。掘りて草と其上。小。氷を。み。極暑。申す。王子。の。氷と。取。仁徳帝。奉。その。始。民間。は。水餅と祝人。俊成。

△水餅と祝人。俊成。岩のけ。水室の雪。水室の淨。水室の。

詞。水室の雪。水室の淨。水室の。

楊氷の面れひらき見す。故の下風
皇の夢さくは代の子先。ふ下風
士高。は本海。と。花のほろり。岩
陣。つ。ま。い。ぬ。夏。は。日。土。と
けて。て。れ。目。氷。ま。ま。ま。の。か。ね。つ。く
連。神。や。り。の。ま。や。の。り。の。ま。か。宗。祇

氷室 周礼ニ出氷室
故事 元主ル官ナリ夏
コレヲ群臣ニ賜フトアリ又左
傳ニモ見ヘタリ日在北陸而
藏氷西陸朝靄
而出之トアリ 忌火の御

飯て供之 忌火とい不浄の火を
打らるるとぞ内膳司
より月次の御神事の食と奉る
を大床子の御座とて供し奉る

獻醴酒 毎日これと奉る
とより今のおまごひの事より
考 年中行司 前大納言
衆子代もさへとをさへ六月の
まごひのこまひも君がまごひ

一夜酒 今日造る明日の供
春め遊べよハ級 京 松ヶ崎
のひとよ酒家定 氷室祭
祇園會銚のら 愛染祭 大坂
と祇園社祭 三寺
開勝曼院看 駿河 山田士詰 今日
藤曼曼ととも 山すりあり

除害のつりたる 家士法 謙事
晴ていまこく回雲りい家士日記 其角
安藝 嚴島市 今日より七月八日
十日ごろより芝居諸商人
多く来り甚どみどみ

三 天気 雨ふれは今月中
日 雨ふれは今月中
返り 京 高権虫 本所
江 法恩

京 高権虫 本所
江 法恩

寺谷中宗延寺 四△六月會

法花千部執行 日傳教大師

忌日寺々行る坂 江戶 箕輪

枕御年高と云く有 江戶 輪

天王 日 京 祇園會山 江戶

牛頭天王祭 日 天賜節 宋

帝詔して今日と天賜 天氣 暗

秋收多し雨止む秋水 多し風雨止む米價貴し

制衣神麴 今日も製衣すりふし

水貯 貯此水と取淨る意は収め

らず此水と醋醬油又ハ漬物も

京 祇園手水の井と開く鳥

今日より十四日まで蓋せり

きまめ引松立し往來の人々

水ひきひ七 △祇園會三社神

御旅所ハ十四日まで御出さる

○七日より十八日まで四条

河原に夕もみあり是と

△河原とくもくのみ

祇園會之何ハ被ふ人の山 保友

狂引て事と刃ハ過りハ祥よ

るハ祇園の令者定難之行風

山鉾 卯下刻四条高倉より

寺町へ出松原迄下りる

より東洞院へ長刀鉾 區谷鉾月

鉾行て自分の町々へハハる△菊水

鉾放下鉾舟鉾笠鉾岩戸山占

出山孟宗山郭巨山琴破山蟻螂

山白樂天山太子山水賊川山芦川

山花盗入山山伏山天神山雞鉾

江戸。神田天王祭。南てんま町御出の品川天王祭。両

社の御輿中の橋のうへへて行合南北へふる故に行合の橋と云

日八 江戸。浅草天王祭。神田天王御帰

日九 京。北野天満宮九度。京。東向の觀音堂よ

鳥越明神祭。隔年子寅辰○千住橋の上と綱を引合年豊凶と云

日十 御射之御占。神祇官の官人主上の玉射より御

源又見と云。吉田西天王祭。比叡山惠心院。源信

江戸。神田牛頭天王神輿。小船町御旗。今日出十二日

日十一 月次の祭。十二月の祭。諸神へ御

幣と奉り。神令食。伊勢太神宮と勸請

申さるる天子と云。神膳と供せさるる天子と云。入道大納言

京。松尾神。二十。天氣。今日烈風と云

と邦芳譜。解齋之御粥。日の御座に大床とて其盤一膳

を立御粥ありき土器又和布の御汁物と云。三ノ口。京

祇園會山。大寺三村。不成。船引初。明神祭。日。就日

京。松尾神事能△祇園會。卯下刻山鉾三条東洞院

より寺町へ出四條へ下りてより西へ行自分の町々へ歸る。橋弁慶

より寺町へ出四條へ下りてより西へ行自分の町々へ歸る。橋弁慶

より寺町へ出四條へ下りてより西へ行自分の町々へ歸る。橋弁慶

山八幡山悪ふ山 辛治の合戦淨明王をまつ 役行者山

鈴鹿山 鯉山 觀音山 鷹山 黒主山 船鉾 未刻神輿三座 御旅所 四

条寺町より西へ渡り 少将井の神輿三座 四條東洞院より上り

二條と西へ御城の前と大宮へ出三條大路を御神供社へ至り 三條黒門廻りの角あり

二座の神輿 四條を とく小島丸へ出るとより 松原へ

下り西大宮迄行北へ上り三條御神供所より三社の神輿一所并

會 一か人此所にて神供を奉る時奉りし千圓子十五百諸人はあつていそぐいそぐ行列

改り三條と東へ寺町を四條本社へ還御 御山くやまてあつて

の と琴をいそぐやせんが 江

戸 龜井戸香 大坂 難波村午頭天王祭

近江 竹生寫祭 日 今明 尾張 山王祭 渡り 初

△津島祭 今明日 五十 京祇 芦御輿 熱田祭

園臨時祭 勅使立あつて まわをいそ

奉らると公事根源 みありと 入られとも今いそぐ 浄花

院垂拂 〇吉 江戸 登山王祭 礼 隔年 丑 卯 巳 赤

〇赤坂氷川大明神祭 隔年 酉支の年 祭の初 日の笠やこ 等出る 四百三十 余丁 あり

〇浅州觀音祭 今日ひんきんの神事 芝浦小鰯網 下と今日返 禁制

大坂 三津八幡神事 今 天王寺 講堂 蓮華會 午の刻

富士雪消 今日より 富士の雪消るところ

〇 万葉 姉の ひんきんの月

連とては、一夏夏の日の雪省相

十六日 嘉祥祝 △嘉定食 △嘉定錢
△仁明帝の時

豊後国より白龜と奉る吉兆と

て年号と嘉祥と改む一説は

同帝の時御代の業と賀茂と祈ら

せり今日吉日とて御祓あり年号

嘉定と改むといふも実記見えず

一説は室町家の納涼の遊小

揚弓を射て負つるの嘉定錢

十六文を出ると嘉定の宋の年

号十七年まで毎年錢を鑄と

し此年毎もちりあり此元年

より錢十六 袖直

文を用ひし △男

とも今日袖ととるく振袖と着

し座鋪へ出て父母もまゝと人

盃をいひき乳母もどりと盃

事あり其後留袖を衣て月の

出ふを見るくこれよりつて月
見の祝儀ともいふ故実なり御
作法に猶 **伊勢** △外宮の御
祭礼あり

故実あり **伊勢** 祭礼あり

讃岐 △志渡寺
祭十五
七日 **筑前** 博多
祭

十七日 **京** 北野東向觀音開帳十八日
△相国寺閣藏法○等

持院虫干○か **大坂** 御霊
△夏神祭

つ川夜宮祭 **伊勢** △内宮
御祭礼 **安藝** △嚴
島祭

十八日 **京** 祇園御典洗 今日み
くとおみ奉る○山崎

室寺觀音開帳○桂川神事能
井大二衆山門の志と執行す

江戸 四谷天王祭 九日
隔年卯巳未
酉亥の至あり **觀音** 今日
日成道

の日 **京** △賀茂御手洗祭 十九日
△亂涼 十九日
△座頭

の納涼。清聚菴のいへ寺へあやう
非 日まゝのいへるの涼外掛
狂 座次危涼しくあはれ酒あり
てしとくひて平氣あきり 宗増

日 元 天氣 今日雲あつち
ハ豊年のまじし

京 △鞍馬竹切 當所の土人茶堂
と西觀堂と兩所集 西方よ

青竹と下木又切と立置本堂の近
江方觀音堂の丹波方と一山の院

主大法事く行ひ終りて及方相違定
声と合て彼大竹と三木伐と七曲の切石の

りく走りゆく早き方と勝と守夜
よ入て奇怪の事も多くなり

日 元 大坂 △上難波祭。はるか町より
仁徳天皇の御祭礼に俗あり

祭云社 元 不成
内宮 日 就日 京 梅の尾
虫下

院 水無瀬後鳥羽 大坂 △座摩宮
御景御開帳 御後

座摩の祭の神五座の神輿御渡り
の道筋の朝辰の時刻もあはれ

本町へ出塚と高麗橋へ入り夫
より東へ大津町のおさび所へ入り

同く申の下へ同く申す
久太郎町へ西へ入りて還御あり

日 元 三 京 松尾神元
事能 日 四 京 △愛宕十日
識 廿三日の
夜より

本明と諸人あここの山 ○東寺
後宇多院御忌并弘法大師像

開帳 日 今明 ○松尾神事能 ○要法
寺虫拂

江戸 芝愛 元 京 黒谷虫
岩祭 日 五

本能寺虫干 ○誓願寺 江戸 龜
虫干 ○妙顯寺虫干

天満官神輿舟とて豎川より一
の橋比川口まで渡御此所にて

名越の御 大坂 △天満天神宮
後あり 御後朝巳刻

神輿二座渡らせり天神橋通
を大川と下の濱側へいで難波
橋まで是より舟を置き大川とあひ
と島やこの宮へ入る夜まで遷御

丹後 △あまの橋立まつり
○切子戸文殊會

越前 日永嶽參拾日
常の參詣あり

京 本國寺虫干
○大德寺華鬘堂

京 鳴原
住吉祭○妙心寺方丈虫干
加茂水無月飲 今日より晦日まで

大坂 玉造繪荷夏神樂
内平野町神明同助

天氣 風雨あまい米
賤しかた南

節折 竹こそ主上の
御しけの寸法

をとりて其やぶ折めてふいよ
とりとりふかりよりの命婦官

主よ仰せて御
抜とつとひる **鎮火祭** 部

氏の人火を打て官城の四方の隅
よて祭事火災をふせせんが為

道郷食祭 是も都の四方
よて鬼魅の他

方より来るを入まふらん
み路上は供物をそふへ祭る

大抜 昔の百官とくく朱雀
門か出て抜をさす麻

の葉と切て抜すらへ麻を抜
草といふべし○此水無月抜の

こと詭多し春より夏の間つる
春の木夏の火して木生火

其外も皆相生かかむ夏より
秋よりつるい夏火秋金火尅金

と尅をるを抜ふとまり然ま
ども土用四季のあつて夏の至

用を以專とす是中央土用の
位するを以てるりあつかひ

玉生金と相生之。按ぢる母
九夏三伏のあつきの邪鬼のこ
くさねがさうのまごころを
行年の半を守りべしと此月
後をすあかんまごの後も
夏越の畧言なり。つぎの詞の
処は委し

⑤ 年中行る哥合

夏はまの麻のふねととりと
あめ

續古今 夏後 家隆

えられてはる、麻のゆめ
川

玉葉 名越後 兼行

風まらるは麻の波は夏
ま

千載 六月後 季通

りふれは麻のま枝ふゆ
ふ

夫木 夏神楽 公朝

河社志のまらうと人あ
つ

堀川百首 河夏後 成行

は後川小夜文ゆるり麻の
ま

同 荒和後 仲実

八百多神もまごふな
い

○荒和はあつゆの神と
わ

詞 竹ま 秋風 麻のま
ま

後川△夏後△夏後△夏
神

後△麻のま流△まのま
ま

△夏後△夏後△夏後△夏
後

⑥ 後とる水は心のちをり
中

⑦ 夕まはは後そ夏はま
ま

⑧ ちと夏ふはとあは後
小

⑨ ちまはと夏ふはとあは
後

⑩ ちまはと夏ふはとあは
後

川社 夏後小川辺は棚を
構

形代 △撫物。神後とる人
形

△右人形とまご身ま
ま

と後川 **小蠅** 人神の

とく悪邪多しといふ日本記
いづ是も夏の熱邪をいふなり

○さなまきあし人神もやまて
今日の名神のくくくく

茅丸輪 午頭天王蘇民將
未又赦へぬ置風

疫病と云時是とかれ災難と通
能振社と信を啓る茅丸神水翁詔

京 ○上加茂水無月能
○建仁寺泉涌寺布薩戒

江戸 ○浅草寺花講
△佃島住吉の御後

大坂 △住吉御板 所より移り物
撮の挑灯 いろくのわたり

手とけくして渡る午の刻頃よ
こいふより鷹鳥師社人社僧神

馬等かど限りもなく次第の
列を守りてとらる四社の神輿

と祭奉る社務の車りて及橋
の本小立る神輿一社七度

此濱小出奉る潮りてりい
りのあひをれより堺の宿院の

御旅所へ遷幸あり神人のつと
と奉り夜に入り神輿住吉還幸

其節堺より送り者住吉迎人多
火ととも夏昼のとは是と火替と

能 夏夜同のゆく方や淡路島 嵐雪
在 儀儀もゆは長のもひりて

金と越世
よはば貞柳 **近江** 唐崎千日
黍り御後

月令 此部より六月下月日
の定まらざる事と記す

土用干 △虫干△虫拂○書衣等
の中は白奥と云故虫干云

能 嫁合の時の枕を土用が其角
搦腦小世をぬぐこの澄るか全

京 妙心寺虫干○天龍寺虫干
○大徳寺虫干いざまは定畏

施米 山寺の僧は米塩を乞ふに
公より下さる 年中行事

この月のやまもりをて知れり
若うせんとの秋のよのとは

雷鳴之陣 雷の音の
三度高くなる

色は大将以下近衛の次將迄
弓箭を帯し御殿は孫廂に

候して天子と守護し奉る
公事根源寺小見へり

香薷散 暑氣の頃専ら
用る薬方なり

暑氣のやまもりをて治す
香薷散を採りて製す

夏節 小兒の頭面は無名
腫物よりなる

霍乱 病の名は夏瘦
霍乱妙基陳皮生姜

水煎用也 〇母の根より 〇芦
花葉とせん 吞てより 〇たの

実香需せんとのしる 〇又法
のしと採りてふつてより

浚井 曝井ともいふ 井戸
替の事 新井の義

めで夏日井と新よとれば瘟病を
やますと見へり 此月

井水と替へたり 今ハ七月
又井をささへふことなり

三伏 三庚閉日ともいふ 夏至
の後第三の庚此日を

初伏第四の庚を中伏立秋の
後最初の庚を末伏といふ

この本篇博 **占候** 三伏の
物筮ふあり 内西北

の風あれは極月氷り多し 〇三
伏ともいふ 熱すれば冬雪おとし

〇三伏の内嫁娶とればありし
〇木と伐ぐと虫むことあり

九夏三伏 九夏の夏九十日
三伏の詠口伝

萬鬼行

後漢の時伏日よハ
鬼出るとて盡日門

戸を閉ぢるハ湯餅を作りて
辟鬼と名づくといふ。素

のこたやしろ紙にちりて祭
をさし虫災をぬぐといふ

水掛合

夏戯まよ水辺杯
て水かけ合さるといふ

竹婦人

竹奴脚馬抱籠
て竹の籠といふ

或ハ足とりてせきとて涼
しかりしひふくひのさう

非此よ吹い先ひくハ舟娘人勝英
たさ終や妻かてきのふ々ハ其角

箆枕

竹とりて是とつふ
竹細工の名地所多出

漆取

うふし乃樹ハ中
心黄ぬしてかそ

水小値て齋とて刀斧
と以樹の皮ふ切目切けを

後憂トて黒色なり此汁と
憂うてこそぞ取るやう

近国小てハ大和國吉野ハ
多く此職あり組ハ篋

取る物ハ是濕漆なり塗
もの不用るハ奥州羽州下

野より出るハセシメウル
シとりハ是上品なり吉野ハ

銀朱ハ合さると用也越前
至て下品なり唐土の塗

日本と上品なり唐土の塗
ハともなごようハ故ふら

こへ渡るとハ黠
○此実より鱗をさるとあり

りつり上品ハ鱗ハ
死鳥鴨涼

此外月露を
とそれハ夏の季よさあり

非そハ名や夕飯のト涼ハ自威

船遊

大名の我儘
舟あそび 季州

汗流

熱拂瘡
身うちまこぬる物

あせの切口
あせの妙茶

お登の土紙粉
あしてつけてよ
又天瓜粉
あして妙え

白袋

掛香
掛香の襟
青か

おやんも白ひ袋
のたぐひや
丁子からの中
あはれを 久清

簞

竹ののこる
庭より暑中
是とあそびて暑
とこる

なり
又藤
あそぶもわり
船
近江表
なむり其角

泉

泉殿
龍殿
泉と水の流
ふ

たてふ家之殿
と家の事
龍殿
瀧をこる
なむ瀧の
とばふ建
てる殿

秀 堀川百首

永緑

あそぶの杖
まじく成ゆ
いづも
新杖
むむやまらん

續後拾
泉辺避暑
公通
去のむ
と岩陰
あそぶ
下は
夏も
あそびけり

雪玉
水風晚来
顕季
夕け
あそぶ
あそぶ
あそび
あそび
あそび

散木
對泉忘暑
家経
下は
あそぶ
あそぶ
あそび
あそび
あそび

月清
對泉述懐
俊頼
あそぶ
あそぶ
あそび
あそび
あそび

玉吟
深山泉
家隆
あそぶ
あそぶ
あそび
あそび
あそび

雪玉
樹陰散泉
贈在大臣
あそぶ
あそぶ
あそび
あそび
あそび

あそぶ
あそぶ
あそび
あそび
あそび

あそぶ
あそぶ
あそび
あそび
あそび

あそぶ
あそぶ
あそび
あそび
あそび

玉吟 夏向泉 家隆

神水（小笠原の法ありあり） 神水（下を）

山家 向泉待友 讚岐

詞増し。湧く。瀧。出る。湧る。松

陰の法あり。岩より出る。万代に流る

けり。蟻。木法。山陰。谷。庭。表。せ

ことありかた。またくろい。昔より

よせ。り。ゆる。液。い。を。え。ふ。虫

り。る。あ。く。く。ふ。岩。の。い。ら。ら。

連 志ある。流る。水。く。人。水。く。宗。祇

三。く。人。の。心。を。あ。く。ふ。泉。く。ふ。紹。也

狂 文。世。の。あ。つ。き。と。折。ふ。泉。く。せ

よ。ふ。あ。つ。て。ふ。あ。の。寂。か。る。を

清水 △清水が源 △清水いさよ

△清水く △清水く △清水く

○石間 △あつ清く △あつ水と

云源い △あつと △あつと

手も汲す清水汲も同じ概

とせせ入せととととととととと

ゆふくこくせせせせせせ

⑤ きくくくくく入相風こそ安也

⑥ 縁の法あり流るひつるまに仲実

⑦ 連流るに流るは宗祇

⑧ 非 名。流。れ。る。と。つ。き。ぬ。流。る。魚

⑨ 雲峰 夏の末は白雲をい

時の間よりく小替する

午より後ふ多し此雲すく立

のかり山よりほきて下根を

夕々々々々々

新題林

為綱

⑩ 草菴 頓阿

草菴

頓阿

この時ふりそわくはさうさうの
かみさうのねらまけそくし

運久々のまじうさうさうのまじうさう

能あわいのまじうさうさうのまじうさう

弘政のいふあふまじうさうのまじうさう

ついでわくあふまじうさうのまじうさう

時令

此部は六月一ヶ月の時
時候はかき事せまむ

土用

四季不寄駐す三月六月
九月十二月の節は入十

三日多土用の入るべし十八日な
と四土用合し七七十二日四季

と入て七十二日宛一年三百六
十日かり十九土用といひも

子より後入る日数さうさう九
日といふも昼夜と合し正しくと

れんやさう十八日土用の夏を以
正しく何れ故もさうさう春の木と土と

木と恐る故専ら秋の金ふて
冬の水さう金生水相生の間ふ

あれん感さう事は冬も亦尔
と春の木との間かて水生木さう

是ふようて春秋冬の土用の土
専ら事不能故に夏の火さう

秋の金と其間土用あつて以て
正しく九夏の火より火生土と土

用を生し土用より土生金と秋
金と生と一年の間さう中央の

土と令と爰の掲さうて五行の序
とさうさうのさう

土用天氣 東風のいさも雨う
成るものさうい土用ふ

の空晴て東風久しく吹とも雨ふさ
らけ長と昔さうらも白さうらも

つ然さうも久しく東風のこ
らけの終ふ雨ふさうらさう

土用占候

土用中暗天つげが
五穀豊年さう久

雨の悪し夕立は土用ふ入三日
り後土用三節と俗諺い此日と

土用中の天氣定む雨ふるること
あつたは曇まは土用中の日和

とらぬ晴天をいへ土用中日
和じ○稲の豊熟土用を専

大切は此節の日和う暑強
多れ虫生せんよく實つ

辟瘟疫 土用其赤小豆と井
華水にて用むれん年

中疫疾の患かゝる
非んはくぬのぬはちのふる其角

夕立 涼雨暑雨白雨○雨の
うら理の本篇ふる

夕立の事へ和漢の書は正理と
みぢりといふ龍のふはを

夕の妄説さう夏月にくぐり乃
夕立りうがく豊まをく龍

ちるべやそれ雨の地の水氣下
天の上りて陽氣散してうり下

さうさうさ湯氣たふふあつ
とらて滴り下るが如く大暑の

節小至りて天のふこととととの
陰氣とたつて高遠かあり其下か

陽氣とたつてく陰氣のふこと
とととを上げてらじて陽と散

とらふ長雨さく或はをさく
ふふつと曇まとも陽氣下

してこれを散ぶふよめてさく
晴る夕立とを暴雨ふること

地の濕氣陽小し立らまのかり
陰氣のふまははつたれども下か

し立る氣をさびき時の中
途陽中の水氣とさき散せんと

とら間か下より段くむのさす
と甚いとよりかありあり

下とらそそれゆへに其水氣の
あつて集りたる間のと降ふより

一丁二丁の間もふる所とふるぬ
所あり其水氣の上るはよのあ

つ山くふさゆる白雲をて雲の
峯と誅とる月の是外よりこれ

を空より出しく雲のやうなるれども
 左のやうに水氣と陽氣とをそひ
 のちとて次第ふ立上り下り
 段々上ると時ハ白と氣集りて
 山さの所次第ハ黒とがらる是
 いよしく水氣の多く上りにより
 てるれハ雨ふり或ハ白雲り中
 天とて高く立上らる横へたが
 けつハ雨ふり其故ハ下よりつ
 上と氣止むにより上り水氣も
 陽氣とて散らるゆへ横へるびく
 たり山さの根とてくくつとて
 ふるも上り水氣つきたる故るれが
 つと上と氣なまきふより上り
 たりも散らるるび山林多と
 所ハ水湿多といより度しく
 立上るるかり山ありても元山の
 水氣なる富士山さど山のふり
 より中途もその材木ありより
 地中より水氣上り雲をかかると

ともつてきふ雲さー山上のさび
 山さのよりてその夜電光すれが
 其方角より雨ふると是も水氣
 の上ると水氣上るとつと陰を
 かりあり上るとつと陽み
 むされて陽氣の如く上る其陽
 氣発出する時ひかり火のよも
 なるを見ふへけつハ黒いとつ
 ども火災さどめて多くをゆを
 本性をあらわしてありー光も陽
 氣の上りけつれがー故ハ此とへ
 る方より上るとの列とて時ハ直
 れよりゆりやかる時ハ翌日ふると

新古今

公経

あすろる巻の雲さあるびまて
一しつとさぬゆさつららんと

千首 夕立早過 後拍原院
あつかるやたつ時のとれつみま乃

たつともさちとてさなるすらん

玉葉 旅夕立 伏見院
あつかるやたつ時のとれつみま乃

神をいへばへと夜う務と
續古 村夕立 知家

蚊や火のけつろを跡ろくまの
くまのさめろをら乃山りく

玉葉 行路夕立 基氏

さゆるべき陰さけきりるくぐと
れれてそやうん夕立乃雨

詞 福り初。風さく。雲ほよひる
ばま。あかき。虹のくけりまを。

を里人。まもる。あめ。さる。村
多。そく。か。かき。く。新。涼。

雨れあ。け里

連 浮橋とつや夕立。天は宗牧

俳 夕暮は花のゆき。迎も。堂其角
夕まや内。あま。く。お。を。全

狂 中まの。あ。か。は。も。子。迷。み
う。け。ま。ぐ。ん。べ。神。合。好。る。常。林

詩 白雨五字對句 同上

竹 竹 竹 竹 竹 竹 竹 竹 竹 竹
竹 竹 竹 竹 竹 竹 竹 竹 竹 竹

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山
山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

カミナリ山ニヒキ

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

神をいへばへと夜う務と
續古 村夕立 知家

蚊や火のけつろを跡ろくまの
くまのさめろをら乃山りく

玉葉 行路夕立 基氏

さゆるべき陰さけきりるくぐと
れれてそやうん夕立乃雨

詞 福り初。風さく。雲ほよひる
ばま。あかき。虹のくけりまを。

を里人。まもる。あめ。さる。村
多。そく。か。かき。く。新。涼。

雨れあ。け里

連 浮橋とつや夕立。天は宗牧

俳 夕暮は花のゆき。迎も。堂其角
夕まや内。あま。く。お。を。全

狂 中まの。あ。か。は。も。子。迷。み
う。け。ま。ぐ。ん。べ。神。合。好。る。常。林

詩 白雨五字對句 同上

竹 竹 竹 竹 竹 竹 竹 竹 竹 竹
竹 竹 竹 竹 竹 竹 竹 竹 竹 竹

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山
山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

カミナリ山ニヒキ

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

六月 晴令 六

世の卿はあきたる蘇をこころ
千首 為尹
いづりゆ世多のぢうまつら
夫さへくふ病のししたる

夫木 為家
友若のり家、若き中のもりのひ
空のやまのこころかまう

風薫 南薫。古文又薫風自南来とあり六月又

あく涼しき風さう
連 風々々々々や浪のむさう 細巴

非 帆とがらる鯛のこころかまう 凡其角
淡茅さやあけおれまき風百川

青嵐 △青東風。土用のころ
空一点乃ふりも

多く吹風といふさう
非 鏽乃たぐ逆さるまほ 一鳩

詩 薫風五字對句
堪露飛堯酒 清暑澄潭月
サカモリ ツユスミク 月カゲニアツサロスル

薫風入舜絃 開懷累謝風
フシギヨクカセカラル

詩 薫風七字對句 詩礎
毫端蕙路滋仙草 逐風輕

クサモメイクニウルヲ
カセモテクル

絃上薫風入苑春 水亭閑
コトノチカセニツレキコユ

暑 △溽暑。熇暑△極暑。蒸暑。酷暑。酷暑。炎日。炎蒸。燠日。
熾日。掘日。炎熱。天△あつこあつ

新撰六帖 行家
水春月のてる日れつりのいまのど
あさ乃海いぢぢはさる

新題林 通茂
あさ乃海いぢぢはさる

非 之といひけりあつてもあつこあつた
屍る小西日れあつた

帆柱の柱さげふる暑さ一丸

狂きよりも百倍あつては天を
仰ふるもの私どもは是燕

日盛ヒカケル 俳 日れはる朱乃
地獄ア日の夜 井雨

詩夏晝偶作 長孫佐輔

南州溽暑醉如酒ナニシテ 隱几熟カクニシテ

眠開北牖シメテ 暑氣苦と堪ガ多酒ヒラキワタレテ 几ニヨレバ神氣 日午ツカレテ オホハスムク子イル

獨覺無餘聲ヒル頃ニ 寂々ツテサメタレバト

茶臼コモレツカニ テ物音ナレ童

子ノ茶ヲヒク白ノ音ノ ミ竹ヤブヲ

ハタテトナリニヤコユルハカリナリ

不怪大暑ハレハ 暑人存ハレハ 暑人

熇暑カキ 逼人ヒル 審

清涼セウリョウ 福フク 不フ 暑シュ 人ジン 存ゾン 暑シュ 人ジン

動定佳勝カク 勝カク 勝カク

水園一掃スイエン 掃スイ 掃スイ 掃スイ

謹獻某物キンケン 某物カクモノ

寔以暑中シツチュウ 清為セイカ 四シ 終シュウ

聊訪問リョウボウモン 問モン

而巳ニシテ 巳シ

尺牘シツテン 各替上中下カクカグシチュウゲ

熇暑逼人カキシュヒルヒル 赤日流金セキニツナカスキナ 溽暑ウヅシュ

鬱蒸ウツシヤウ 炎令灼エンレイヤク 審動定シムツクサマシマ 起キ

居平安キウヘイアン 興起キョウキ 逞寧テイネイ 平生之ヘイセイノ

休暢居止之祥キウチャウキョウシノシヤウ 多快タカイ 慶幸ケイカウ 愉ユ

然セン 欣躍キンヤク 健羨ケンゼン 謹獻キンケン 以投イツ

然セン 欣躍キンヤク 健羨ケンゼン 謹獻キンケン 以投イツ

然セン 欣躍キンヤク 健羨ケンゼン 謹獻キンケン 以投イツ

○送之ワケル○聊具イタカ○捧呈ホウテイス○献呈ケンテイス

○奉上ホウジョウ訪問ハウモン○窺光震之志ウカフクサヒラノミコシ

○訪起居ヒツラキキヨ○報平安ホウヘイアン

○同報答ドウホウタ 左一尺牘サハシツク

由使ユシ味アジ氣キ為ナリ之ノ正マサ氣キ

勞ロウ介ケイ使シ訪ヒツ炎エン旦タン 被レ惠ヒ

鮫サマ一ヒツ桶ツケ之ノ魚イサ之ノ味アジ不レ少ク

之ノ客キヤク 美味可賞ミヅウカウ殊恩シュオン

須ス謝ゼン 加減カケン宜イ引ヒキ与ユ未ミ亦ヤ存ゾン

暫シブ待マツ來キ會アイ

尺牘シツク 昏替コンカヘ 上中下

勞ロウ介ケイ使シ傳デン命メイ○走使ソウシ炎日エンニツ燠ウツク

日ヒ○熾日シバツルヒ○蒸暑シヤウ被レ惠ヒ○厚コウ賜クダリ

嘉カ惠ケイ○被レ投トウ○分賜ブンクダリ魚イサ醢カイ魚イサ醬シヤウ

○美肉ミニク饗ケウ食シキ供ク○偶有ウケアリ客キヤク至キ共ニ

適口シツコウ○以饗イケウ賓客ヒンキヤク 美味可賞ミヅウカウ○口

美可愛ミカワイ○殆潤タイジュン藜藿レイカク之ノ膳シヤウ 殊恩シュオン

須謝スゼン○拜而受之ハイニウケテ○愛我アイガ至キ矣ヤ

○九拜以謝クニヒツクテ暫待來會シブマツキアイ○期顧キスコ

問モン○叩謝以面クツクシテ○待問尋マツモンズク

真瓜マウカヲツカフトキハ 園瓜ウヱノカハ 黄瓜ウヱノカハ 瓜カカク
ト 異名ニハ 玉質タマシク 氷漿ヒョウシヤウ 黄花キウカ ト

青門アヲ 東陵トウレイ ナドハ 瓜ノ出ル所ナリ
西瓜シヤカノヲ 綠蔓キナトツカフナリ ○納涼ナツシヤウニ

襲フク清風シヤウフウ 橋下ハシノシタ 流泉リウセン 又ハ 披襟ヒキン 林下リンノシタ
ナドニ 有レ 暑ヲ避ルニ 蓮葉レンエフヲ取リテ

ユレテ 杯ハイトシテ 酒盛サケノカミズルヲ 飲碧筒インヒヤクト云
棚テヲ結ムス テ 日蔽ヒツカシヲスルヲ 張蓋テウカシトイフ

涼シヤウ △涼風シヤウフウ ニモモ 夏ナツトす
△天末テンマツ 野亭ノテイ 夏朝ナツアサ 為兼タカシ

納涼ナツシヤウ 納涼ナツシヤウ 納涼ナツシヤウ 納涼ナツシヤウ
納涼ナツシヤウ 納涼ナツシヤウ 納涼ナツシヤウ 納涼ナツシヤウ

嘉元千首 山家夏 為相
古今六帖 公朝

夫木 樹陰如秋 仲正

夫木 樹陰如秋 仲正

夫木 樹陰如秋 仲正

夫木 樹陰如秋 仲正

夫木 樹陰如秋 仲正

夫木 樹陰如秋 仲正

夫木 樹陰如秋 仲正

夫木 樹陰如秋 仲正

夫木 樹陰如秋 仲正

夫木 樹陰如秋 仲正

夫木 樹陰如秋 仲正

夫木 樹陰如秋 仲正

夫木 樹陰如秋 仲正

夫木 樹陰如秋 仲正

夫木 樹陰如秋 仲正

月清 松下納涼 後京極
露の跡ふとれて小糸おたふりて
松を中とらるる巻乃のまのて

續千載 森納涼 為氏

松風うらた夜子のそり

詞原 風袖 衣子 水邊

山陰 松も山陰納涼まどわたり

よきうぬ松風かきも 山下水

苔野 湧 果 玉ぎ 松の涼

泉はあまの水 まうあ 雲うね

あまのうま 雲涼 結ぶるに

夜をさる 松陰 本陰 雲ぎ

此家 風かき 松の涼 雲あやめ

蓬 草 山風 夕風 松の涼

松風 本陰 月 月 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

水辺 月 松の涼 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

月清 松下納涼 後京極
露の跡ふとれて小糸おたふりて
松を中とらるる巻乃のまのて

續千載 森納涼 為氏

松風うらた夜子のそり

詞原 風袖 衣子 水邊

山陰 松も山陰納涼まどわたり

よきうぬ松風かきも 山下水

苔野 湧 果 玉ぎ 松の涼

泉はあまの水 まうあ 雲うね

あまのうま 雲涼 結ぶるに

夜をさる 松陰 本陰 雲ぎ

此家 風かき 松の涼 雲あやめ

蓬 草 山風 夕風 松の涼

松風 本陰 月 月 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

水辺 月 松の涼 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

月清 松下納涼 後京極
露の跡ふとれて小糸おたふりて
松を中とらるる巻乃のまのて

續千載 森納涼 為氏

松風うらた夜子のそり

詞原 風袖 衣子 水邊

山陰 松も山陰納涼まどわたり

よきうぬ松風かきも 山下水

苔野 湧 果 玉ぎ 松の涼

泉はあまの水 まうあ 雲うね

あまのうま 雲涼 結ぶるに

夜をさる 松陰 本陰 雲ぎ

此家 風かき 松の涼 雲あやめ

蓬 草 山風 夕風 松の涼

松風 本陰 月 月 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

水辺 月 松の涼 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

月清 松下納涼 後京極
露の跡ふとれて小糸おたふりて
松を中とらるる巻乃のまのて

續千載 森納涼 為氏

松風うらた夜子のそり

詞原 風袖 衣子 水邊

山陰 松も山陰納涼まどわたり

よきうぬ松風かきも 山下水

苔野 湧 果 玉ぎ 松の涼

泉はあまの水 まうあ 雲うね

あまのうま 雲涼 結ぶるに

夜をさる 松陰 本陰 雲ぎ

此家 風かき 松の涼 雲あやめ

蓬 草 山風 夕風 松の涼

松風 本陰 月 月 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

水辺 月 松の涼 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

松の涼 月 松の涼 松の涼

雲連海氣琴書潤 水殿涼

風帶潮聲枕簟涼 青琅玕

沙界樹涼晴作雨 着衣巾

石渠泉聲暗流水 涼風來

何以消煩暑端居一院中

長物窗下有清風 眼前無

為空室 熱散由心靜涼生

與人同 此時身自得難更

夏之限 夫木 為家

晚夏 夏深夏果夏暮

秋近 秋待秋隣

草木 此部ハ六月一ヶ月

百日紅 紫薇花 怕痒樹

苧麻苧 白麻 市尾 皮

麻よりいよろくさけ安し大

繩よりら破のつるし守

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

麻

△櫻麻花の柄は似たりあり
△夏引の糸のあさの事あり

△麻刈の非は麻刈と夏ととる
異名漢麻。黄麻。麻仁。油は制して

麻の皮でとらて糸よとるこ

夫木

菽蓮

賤の女がふくしとさる居る

さうあさ生るあふの下風

夫木

土御門内大臣

かろるやとあさのま枝のまらけ

えけ未奈よるるけきき

④ありまると花はかろる麻宗祇

⑤朝野の妙うまそのかせさし徳元

⑥まとの形ひまるとて搦麻文産

花青と穂をまると出羽最上の産より奈良晒を織るもの

是より東国西国共なく植や畿内東南よりかろる麻と作らす

苧麻

○和名かろる。○真苧

綿の花

ひかりは穀皮でりて衣服とす

是を木綿とらふ長紙のこしより

今衣服又織るふ木綿といふ

古名と用ひるるり神人の用也

ふ木綿たもれも古来の言あり

中世民用専ら麻布と用より

今の州綿は桓武帝の朝は異

国より傳り唐土より宋の

末より植ふ本朝より二百年

さう遅し其後種を失ひて

中絶したりしを文祿年中に

種を得て諸国に植る○多田

綿花黄は実白く糸よりけり

尤可けまは少き今これを

うんご○蝦手綿葉は深き

さみあり白花めで桃大きて白

然まは桃少き○神樂綿

花白あり黄るありあるりて

生ず神巫の持つ所の鈴は

是と植て大に利ありの佐利綿
の枝葉赤色を帯ぶ桃多し昔
姑この種を得たり聶乞ひ望
めども種をあらんと聶憤り恨
みて其妻を去りし又依て佐利
綿といひあらせりとの烟草綿
の葉青色はて間々小葉を生そ

新撰六帖

家長

あまのふりあひあひあひあひの
うへへし綿のたのふそあけら

竹皮散

△竹の皮脱るとと云
ても季にうるべし

鳥扇

△ひあき○本州は射
干と同物とす然とも

花形ちぢりり 莖葉るるく弓
の長さこつれりの射干より莖
短く葉扇のごとくあひびるもの
ひあきなりとれども和名ふと
一種として射干とあひあきと
と訓るるより連俳にも

射干とかくきり

夫木

西行

遠生いさるるやあれとるの面
かくすあきさのさくあひあき

玉簪花

白鶴山大さうりの
と俗に亀やじと云

釣鐘草

地参の紫花とい
らく形釣鐘の

あし又白花淡紫の花あり
俳の種まはは付る名は越人

麒麟草

高さ一尺と云り
形并慶州に似たり

馬鞭草

○馬折の鐵莖葉
花を色ちて穂の

あし一六七月花とひくく
○夫木 俊成

紫はる小遠みわへふまのつら
むつらげたて世ふもあけら

猫兒眼睛草

澤漆此
草の形

燭臺のつた故。燈臺艸くし
野は多く自然と生じりあり

剪春羅 春羅漢宮春
眼良俗字あり

○さうさ眼良。紅白さうたさ人
花の大きき錢のおとく

狂人のふりつる所解るるを
花を花をいづてして見ま

虎尾花 花白し虎の尾
のわらふ似し

畫顏 鼓子花
○旋花

狂者子の屋上りどもにふそと
狂者子の屋上りどもにふそと

教へ息より花の咲く人藤柳
教へ息より花の咲く人藤柳

夕顔 空盧 瓢瓜
○瓢瓜の花

六月頃白き花開く登り志ん
夕方は咲く故は名づく

夫木 定家

けりするを方人の社うしよ
あゆみしつるさゆふなれむ

千首 垣夕良 為尹
かみさりの竹乃あは経末こえて

詞 白翁 あぐさるるさはめてあぐ
根根。枝々房。花々。光りこふる。咲て

そそ人又向られ 外面娘の女。茂
行雲。伝言。秋葉

連 夕良のあががさる縁原宗春
夕良のまゆじき垣根うか宗養

俳 夕良や一印の寺花の春 其角
夕良や白き鶯垣根より 仁

夕良は新炊墨き兼ふ越人
庭ぎよしの内後ふりし夕良の母や

ひさうは今うも軽い喜り門 正名

詩 夕良五字對句

幸結白花了 松虫声 不去

六の九

寧辭青蔓除 暮雀意何如

瓢。味其苦故苦瓢。對。てかんびやうと名づく形色者

瓢のかり物ハ長ふくべまれば浪花木津難波今宮住吉

ちりり以作るかんびやうハ昔炭斗かてりり一名盒盤葫

蘆と云かんひやうと云ハ瓢とかくべー瓢ハヒヤウの音ふま

浮の意くまりて酒器小制アうろと瓢といふ木ハ瓢瓢

ちりりやかてりりて酒器をふ制アうろ瓢葦といふと知べー

干瓢。新干瓢。土用中ふじさて

寸河内根津又多一伊勢より出でても味あつる

苦瓢。瓢葦。夕顔と一類はして別種味はじ

夫木はしろくを好むゆゑ林のあそびを好むもの

商陸花。花白赤あり白花のいの根も白

山慈姑。俗黒くくハ花淡赤色此根解毒丸

鷺草。花白く鷺又似たり連鷺草ハ葉大なり

花白く鷺十羽ハ飛ハ形似たり

蒲穂。香蒲。穂の形銚に似たり故蒲銚といふ

蘿摩。花紫白色秋実と生を屋らまはし採綿久用

緑豆。花黄。和名やえりといふ

艾實。花紫。花の下に実るハ生す赤

草。水草。正字慈姑。燕尾地錦ハ花黄



○形燕の尾に似たり。根は白く
こゝろ一振又歳二十の子で生を
○沢渾とれりして古人乃
俳借よもよもたり誤るる
沢渾の和名はまゐと
いふておろしの名なり

○非 竹葉のたゞの純子外嵐雪
○河骨 萍蓬草 非 河骨や
○五 橙よまを多る夜半樂雪

菱花 菱。菱。五六月小
白花開く 夫未為家

舟こゝたたくも淋 青ぬるま
菱るる五やびくくくん

詩 菱五字對句 同上

浅渚菱花亂 蟾影搖輕浪

深潭行葉疎 菱花映淺流

詩 同七字對句 詩礎

松葉正秋琴韻響 翻池上
菱花初曉鏡光寒 小池清

詩 菱花之詞 唐 李嶠
鉅野韶光暮 東平春溜通

影搖江浦月香引 棹歌風
日色翻池上 潭花發鏡中

五湖多賞樂 千里望難窮
日ノ池上ニサシテ花ハカガミノ中ヨリ生
スルヤウナ五湖ニハヒシノ多キ所ニ三千

里ノ眺望
ヤムコナシ

蓮花 △花房の蟬の樂
△白蓮 △紅蓮 △水芙蓉

△池見草 △露路堪草 △蓮ハ
泥より生して志くも清浄なり

性糞溺を忌む周茂叔が云く

菊の花の隠逸あるもの牡丹の花の富貴あるもの蓮の花の君子あるものありと

◎文治百首 西行

とちかろ月の内をせむ池と
ところをえてせむまらふ
夫木 蓮開水上紅 千里
秋近く荷^{くさ}あつるあけうの
くれむ井ふく色ぞこころ

山家 蓮満池 慈鎮

よのけり月やとくを渡り
池よ蓮乃花ぞたみあり

詞句 濁り水は風流なる蓮
系れあはれらる月 蓮はあふり

中守 教ふ蓮の巻蓮の上や
ど高たりの池の中 蓮はあつて
池の濁り水はあけうの
あまふる。病 蓮はあつて
蓮 あまふるの香蓮蓮はあつて
濁り水はあつてあつてあつて

俳句 蓮の歌に歌ふれども蓮は其角

泥坊の教ふ水のまらふら 全

狂花瓶のまらふらとつり

あまふるまらふらとつり 宗増

生佛りや人もいなり 種好

詩 蓮亭對句 同上

白蓮吹次鉄 稲花千頃外

香謁坐来清 蓮葉雨池間

詩 蓮七字對句 詩礎

蓮花直撲青天色 渚蓮愁

玉女常含白雪愁 上蘭舟

波廻片々青蓮出 識采蓮

日落山々彩鳳飛 採蓮舟

採蓮 崔國輔

玉淑花爭發 金塘水亂流

花サカリナル頃ハ水ノ源モミタレサワグ 相逢畏相失

並著採蓮舟 花サカリノ頃ヲノバ

サバ花ノチリ失ニイ

遊ント舟ヲモヨホスナリ

碧沼停寒玉 紅蕖映綠波

白紅ノ蓮花ガサキテミドリノ色ナル池ニウツルニキナリ 粧凝

朝日麗香逐晚風多 花ノ色ハ朝日

ニウツクシク香氣ノ薫シタルハ夕風ニヨホレ 游戲金鱗

出飛揚翠羽過 鳥ケフカキリチ

納涼依水榭 還續采蓮歌

スム所ハ水辺ノ基ニアズビウタヲツクツテタノシムナリ

曲池荷 盧照鄰

浮香繞曲岸 圓靚覆華池

香氣紛紜トレテ岸ヲメグリ圓ナル花ノカゲイケノオモテヲオホヒカシス

常恐秋風早 飄零君不知

秋早ク花ヲチテヤシ蓮ト今ニナランコトヲ知ラスレテナガメタマハントナリ

○金絲蓮 紅花 金色の筋あり

甚ど珍あり ○大紅蓮 花淡紅

色芭蕉の花似たり花ありて

実のくす ○天竺蓮 花紅千葉一

列又むく 昼夜一がまず ○蓮

ハ子の名あり 菡萏ハ花ノ名

ハ子ノ名あり 莖の名あり 藕ハ

根の名あり 荷ハ葉の名 俗ワハ

荷葉 浮葉と藕荷と

あつみの葉と荷とつゝ根を藕

とつゝ花を蓮とつゝ荷縫水芝

夫本 定家

蓮 舟とつゝ白くをまはる風不露

非 けまれば水ものひろくす外野馬

蓬萊客や雨ふ多地の水かみ道之
て手枯之蛙の志もあつり風光
狂君よよひり花のまはるる
水く味もをけみそえど貞古

詩 荷葉字對句

同上

緑水飯香箱

依崖假松蓋

青荷包紫鱗

臨水羨荷衣

詩 全七字對句

詩礎

桃花尚憶當年宅

荷花香

荷葉堪為卒歲裳

聞菱荷

新荷 唐 李羣玉

田々八九葉散點緑池初

ハジメテ葉ヲ生ガリヤ 嫩碧纒平

水圓陰已蔽魚

同レ然レ丘九キ葉ハ 淨萍遮不

合弱苻纒猶疎

波底芳心卷未舒

蘭花

夫木 川のみをくや河邊のあを

とせおゆひ一夜秋をよ

とらえんて製とる小刀て持て

指を押し皮とさけて燈心を

出さく九六方うそ燈

心半方出るを上品とす

玉用よ入て刈きり畳の表不用

ゆりの備後と上品とす女のす

きて此業ととげむ一日ふ二枚

うくさる女の媒人なりとさる

席草 是ハ琉球とつて同

下品 **刈管** 土用入晴天
り いりくわす二三

日ふり上 たぐい色ようす 文
立い あへ色あくまび入り

① 万葉 皆人のまゝあてふる夏
あつてのほもき ををみ 人丸

② **藍** 刈も夏より二番刈ハ秋
あり 京都の産を上と

と根をは ちぎして刈るゆへ
り あつて用ゆ色うつくし阿州

ふ多く作る 其葉も大なり

③ **新撰六帖** 知家
刈 あつて米のすしをそとれば

あく を深しつらぞあつて

④ **稻茂** 秋ハ葉紅くあつて
あり りちぢ秋の季

⑤ **新撰六帖**
あつて 月のせもいそぐゆへ

⑥ 夕日 あつては葉枯れもぬ 紹巴
非 あつては葉のあつては葉

⑦ **青田** 六月青と田ハ景と物
あり 詩にも作まう

⑧ **田草取** 五月の
あり あつては葉のあつては葉

⑨ **蘆茂** あつては葉のあつては葉
あり あつては葉のあつては葉

⑩ **林檎實** 文林即果未會
あり あつては葉のあつては葉

⑪ **林檎** 委く三月の部
あり あつては葉のあつては葉

⑫ **林檎** 五色林檎至て上品あり
あり あつては葉のあつては葉

⑬ **林檎** 五字對句
あり あつては葉のあつては葉

⑭ **艶和蜂蝶動** 香帯管絃聞
あり あつては葉のあつては葉

⑮ **早桃** 非 扇あつては葉
あり あつては葉のあつては葉

⑯ **早桃** 非 扇あつては葉
あり あつては葉のあつては葉

青鬼燈 酸漿草 青蕃椒

俗ニ南蛮胡椒。又高麗胡椒云
秀吉公代朝鮮時渡る故名付る

菱荷子 俗ハ夏あると夏めが
秋生ると秋めが

凌霄花 異名紫葳。陵時
夏より秋まで花を開く

非のせいのかはさういふのくげ 風鈴

詩 凌霄花之詞 吳震全

素娥昔日宴仙家 素娥ハ仙
女ノ名酒

醉裏從他寶髻斜 酒
ニ

エフチ髪モ 遺下玉簪無覓處 カタフキタリ

林花 今其カシガ化シテ花
ト咲出レト戯作ルナリ

風蘭 挂蘭。仙草。風て好て
茂る故に名づく

非凡常や風下 花黄色
つらと葉如如 汐見坂 汐見坂

神馬藻 銚子の歳旦より
夫木 信貫

いふに海まゆりてその
本は丸まゝいそへま

豇豆 小角豆△青さげ△十
ハさげの花白

能瓜 瓜の類多し多
く五月に記す 甜瓜

甜瓜 瓜の類多し多
く五月に記す

瓜 瓜の類多し多
く五月に記す

瓜 瓜の類多し多
く五月に記す

瓜 瓜の類多し多
く五月に記す

瓜 瓜の類多し多
く五月に記す

瓜 瓜の類多し多
く五月に記す

月のそりしと奇大坂の東黒門
の所小作ら上品とす唐の青

門瓜上品とびつ又偶然なるあ
能干瓜やうあるてす管小其角

熟瓜 甜瓜の種類 菜瓜
味少く酸る

甜瓜の種を嗜て 南瓜 寛
菜瓜小変する物有

の頃本朝へ種を得て長崎小作
る子なる諸国は多る形ち

尤く多る瓜は南蠻より
とらとりて南瓜の名あり

南京瓜 南瓜と同種類
形びんぞくそはじ

かぶらや唐のすびともつとて胡
地より其始出たりたりたり

阿古陀瓜 是は甜瓜を
長く煮ててくふなり

○南瓜。南京。阿古陀等夏の

季ともあり又秋の季も
を通俗志其外多く秋は

出たりの花として夏は用ひ
花とせりして秋は用ひて可

るらん所存よりべし然
れとも時珍が説は南瓜を

八九月花ひらき瓜をひらき
とあり是まは花として季小

五月とをとり入るとも
のてせんあま記と

楮花 紙をた草の楮の制
して紙をさる木あり

黒ひやうをふら上紙をさる
つとをかきとつるの防明とて

多く作る白ひやう青ひやう
をさるともども其外数品あり

○秋葵とつるの草あり楮とい別
あり五月花咲くあひは同

紫蘇 赤蘇の挂花。塩漬
して食ふ大小二種あり

六月 草木

六月 草木

蒜根 夏よりしてたく久食毒を解し悪瘡を灸す

胡荽 夏実とて生るりの香ありしれども悪臭とて去る

香ありきものと食て後この物を少くく入らぬちあき香とゆらん

痘瘡 けがきを去る法 この実をせんとてかぐよそげにたち

さら痘瘡の色 **繭突** 粘膠ありきものと

繭樹の皮と剥き水にたじら茶をかくと去りて制す

夏切茶 茶と賣處の家六月新茶と壺入

紙をく封じ壺と賣るは是と買ひ封を切て遣ふなり

種植 此部の草木植う壅培採るの事との事

種植 先月とあるは分あといひ今月も蒔べし

茄子とあひ法 花の咲く時分その

葉を取りて四ッけは捨そのを以丸く灰をかきあけて其上を

入ぬまらん壅一をそびたくさんなるなり

壅培 橙ならなる等又芽の灰羊の糞とつら久

の実する事おし一〇菊よん土用の後ふやいとかくべし

灌水 此月暑氣はるるゆ日中よ水とそげけ

かまろく晩よんとそく朝にかまろく水とそくぐべし

採採 麻苧のの登州席州のこげ右のか此月刈とる

生類 此部よん六月一ヶ月の生るのよのひ

燈蛾 燭蛾の火蛾の飛蛾の形黄蝶と似て枯渴なり云

蟬の諸聲 多くてまはひらう

蟬脱 空蟬。蟬の皮とぬき

夏虫 夏の日づくの虫と云ふ

残蠅 蠅の秋までものころあ

金龜子 蚊蟻 鳥毛虫 螺 蝸 蟻

蠟 俗に水道蠅といふもの夏

鱒鱒 一名地虫又根掘虫。お

糞土中にも生じ 練雲雀 卵

かひ直るはもとふ下らず先

五六間も脱旁をなぞりて

かへてふるたをあらたむこ

のたれを練雲雀といふ

二説ふ音を入るはうのこころ

非 葉ふたのいまはねはねの雲雀

鶺鴒 たるふひむらとぞ

ひむらの羽をかゆころ

さけの飛こより取やはじ

川狩 鱒 鱒 鱒 鱒 鱒

大抵の鮎とる事なり

川物やとるを汲て得製置

鯖釣 青魚。其色青し故に名づく大なるものを鯖と名づく海中にて釣るなり

海月取 海母をいふなり

仲正

此部より六月まで必用の養生の法等と集む

必用

破	暮六ツ 午の方	夜五ツ 未の方	夜四ツ 申の方
軍	夜九ツ 酉の方	夜八ツ 戌の方	夜七ツ 亥の方
敵	朝六ツ 子の方	朝五ツ 丑の方	昼四ツ 寅の方
方	昼九ツ 卯の方	昼八ツ 辰の方	昼七ツ 巳の方

日刻 未の日の刻事と云ふ用也六月建

出行作事 東の方へ向ひて

今月天道

東は行くが故なり又西北の方へ行くは用捨あり味方よして

利あり敵と云ふて利あり西南の味方より利あり

樂事 詩も六月徂暑と云ふのや

て見よの薺の咲き蓮の花も寺院の池清らふ香ひは折くハ

雲起ると夕立のけしき一陣ありと云ふの木のうらりき

まよふ心もゆき

天気 水の笈小清く流音

當月の長雨ある事すくハ雲出雨を催せども天の陽氣つれぬ

よめて陰雲の氣消して晴ふなること多し此月能天気といふ朝

東風よく朝ありしより四時分より次第小南へまわり西ふか

なること此風ふき出せば雲も晴を照つて五穀豊熟

とそれより日暮まるる次第
 北へ替り北東風小かるるれど
 夜北より昼の照つあど吹はぬ
 露をぬる縮の甚より此天氣
 づく時ふ折々夕立 **風** 申酉
 吹を西よせといふ日和つきて
 よう未申より吹を沖氣と
 り朝づら曇も日和つぐ
 りの曇も日々曇り雨げ
 志死ふ曇る此日和長曇る
 其うちふと曇り出せば曇り
 晴るかといひ人未申沖より
 雲をぬりて雨と曇りして
 つまふも長曇るを曇る
 ○北西の風とあせといふ雨曇る
 曇を夕立もせむ○東風は
 けて吹は雨ふるも夜露路を
 あげぬ○東北の風久しく吹
 て空晴くると日和東風といふ

十日も北日も雨曇る然れども
 終に雨小るるとあせ○東北
 東南の風小て曇る
 湿氣にるる下地なり **雲** 西南
 小白と雲出て東へる曇る
 雲といふ晴天けさ夕立ると
 志て縮 **朝霞** 東方日出を
 小宜し **朝霞** ころま曇り
 あくり久しといふ是ひ曇るは
 ○朝東方あかく満天へうつり
 あくれい三日以内雨曇る
 志て朝曇り雨と曇る **夕霞**
 西赤く南へ廻る曇り日和秋の
 氣ふる曇り北へま曇ると曇る○
 久しく早曇の後山谷と **占候**
 此月暑氣薄けま曇五穀よ曇る
 かす蠅ふけま曇新舊の米價貴
 一○白雲北斗の下小横曇る
 雨とま曇る○月内西北風吹曇る

批あり。○今日西北風はくきて吹へ日和あり。夕立もせず又この風は冬の河凍りて舟は通ひ不自由く。○二十七日二十八日辰の刻風と主る。○東風久しく吹と好ま東風のと吹と夜露をゆらさず稲生長に
衣服式 帷子と着せ袴は浅黄ありし
 小紋継上下の畧義綾子肩衣ハ嚴暑と凌くも以後製のもの式礼の時 **時衣** 女郎花衣にて青の用ゆべりす
 青 瞿麥 **女衣服** 朝日よん帷子を
 衣おきて薄す
 さら上褌の縮らみ或はじきとさかやうのひんあめをまきと嘉祥は月乃祝儀の地
 こんのさねらぎをまきと **生**

花之式正 百合 **養生**

心旺一腎衰一精化して水とふるよくけしして腎氣とかへるさへ冷水ふて手と洗ふと五臓をかきむ沐浴又冷水と足と洗ふとす風にあらて卧しとらまは生冷の物を食とべしとすとて是をゆせば秋小至アと瘡疥を發すまうくと云病の此月ふ多きと陽と受くと癸とと地ふまは強く驚く小を非と

妙藥方 夏暑とあつれらると中暑とす香薷散と用

○老人虚人の清暑益氣湯は人参。白朮。麥門冬。五味子。橘皮。甘草。黄柏。黄芪。當飯。

霍乱 霍香正氣散

○時氣とあり又い食傷とい 枇杷葉湯 ○霍香中菽木中 吳茱萸 小 天同桂 中 甘草 小

冬月凍瘡と發せざる

妙術 當月さぐまて暑き日
大蒜と油をたたらして

手足に塗る瘡ありと
と發せざる事妙なり

厭患拔の妙術 今月熱と
取り黒焼

して石灰と磁石と右三品と合
せ壺に入れて水と入米と入米乃

とろけし時あぶら油と
出でし油を紙で濾して用

鰻松明の法 蒲穂を二折し
油を塗り又

わけて油とわけて又下すかき
はらふ事三四度して其上と

鰻の皮を巻き又油をわけて
あけて火をきせば雨中みも

消る事
さる事

六月飲食并料理献立

好 温暖のりのあるひは
物 きりのとろりふは宜し

禁 生冷とくひのものと心の非
物 野鴨。雁。あひすと食へば水痕生

發飯 水つちめへ△水飯もかく
△洗飯。飯と水を洗ひ食ふ

非 ぬめぬめかいたぬ
瓜のまぶら其角 瀧鱈 せじ

精 △乾飯△引飯△冷水ふひにて
食ふ河内道明寺お作る物甚は

冷索麵 △冷麩。ゆがく冷水
ふひこーたるひのえ

狂 狂は狂乞と李白よ見せん索麩
の四よりはやく湯のあつる系 梅子

瓊脂菜 石花菜△心太(非) 志ろ系
△あつてと出せば心太油風

狂 系のもろたところてんやのつたが
價でんきの菜かりしる 遠舟

料理汁 ヤササの 大ろん 大ろん 大ろん

皮ふく 一口茄子 塩 塩 塩

清汁 清汁 清汁 清汁

青こんぶ 塩煮 鱈 鱈 鱈

あじさい 大ろん 大ろん 大ろん

あじさい 大ろん 大ろん 大ろん

差味 差味 差味 差味

煮物 煮物 煮物 煮物

吸物 吸物 吸物 吸物

吸物 吸物 吸物 吸物

精進汁 精進汁 精進汁 精進汁

青さだ 青さだ 青さだ 青さだ

豆 豆 豆 豆

清汁 清汁 清汁 清汁

贈 贈 贈 贈

差味 差味 差味 差味

煮物 煮物 煮物 煮物

和會物 和會物 和會物 和會物

大推茸 大推茸 大推茸 大推茸

竹の子 竹の子 竹の子 竹の子

吸物 吸物 吸物 吸物

吸物 吸物 吸物 吸物

六月食物用意の品

醬油造 △納豆仕込 △ひ

一は造 △奈良漬製衣を

右の品々はとうとうとうとうとうとう
しく日本歳時記といふ春に出る

水の粉 △葛粉水 △砂糖水 △
振舞水 △ふきも夏の愛

麻地酒 ○暑中夏酒を
美濃。豊後又い南

都より出ふる浅茅酒もいふ
能 研てふふふふふふふふふふふふ

干瓜の法 瓜と二ツ二割り
中子と去りハ

九分や塩と入一夜をうと
うけをえ明日取り出し上

下々ふおろす 干茄子法
日干すべし

つれ茄子ととう皮を去り二ツみ
割りて干け用ると久水おもとじ
て煮る 豇豆塩漬乃法

米糲一斗小塩四升合せワラ
さげをええええええええええ

く損せど茄子と 甜瓜と
又此如くすれよ

久敷貯入法 打綿と箱や
うの物入

其中へ瓜をつみ蓋を能くして
つら瓜こめをけが百日の持ち

尤土用 瓜茄子の類年
の瓜は

中貯法 寒の中の朝を盡
入る夏

瓠瓜茄子の類を漬さひ色
うらぎすして久く持つ潮の渚

より五六丁も沖の潮より江
へあわうみけよくして悪し

甜瓜年中貯入秘傳

随合大瓜の蒂より頭よはきあ
たるやど著るそ穴をあけ其口を
明礬と二斗をいへ木をみ糝半
合まをま都合一斗るるハ塩二
升入るけりうそ漬置キ桶よ
てもつがよても口とく風の入ら
ざるやうにまぐへ今日漬まこと
九月より未勝手出してつら
べし味いひきくま 酸将水子
撒ぶる事ふし

と貯法 色好赤とると枝と
りん土用の井の水か

漬をれ秋よ至て又水と替へ
かくのごくすんば外の壳紗に如
く遠通してやぶるさし
と酸と水とをよし

夏月

氷と寒中れ如く梅

法 銅の器小厭まで汲りたる湯
を入口と能はめ水は入らぬ

かうわで井の底へおろして付て
流り半日一日や置取上り

寒中氷は火よりかりや夏の
内煮凍と梅の小葛粉など用ふ

及びと至極よ **又法** つね水と
く出来さるる へ堅く

口として釜は湯と汲らし其内へ
入ると湯玉のころ時取上り井

戸の中へ入ると **青瓜裁瓜**

忽ち水とあつと **年中貯法** 瓜を四割ふ
して塩をぬ

を下し一日置てのら新酒乃
樽は詰り張こめ置ハ年中変

らむ時分の生れ **茄子瓜**
如くうらむと

大角豆青漬法 五升塩

二并右二品を合せ瓜大角豆
をまき漬さくべしつらまども色
青々として生れど但 白瓜
風のつらぬゆにまきべし

翌年まども青く貯置

法 赤土一抔 塩六キ五合右赤
土を砕きまきつらひて塩と一

筋を合せまき白瓜二つまきつらひて
中ごまを餛煮さくへ右の土おて

つら置べし来年 夏者火
まき色つらひまき

凍まきつら法 鯉こま其外
海魚うしほもまき

精進物しんじやうぶつもまきなまこも又ハ醬
油あぶらなどおてま煮る中へ石花菜

と四角は切りて五つおて入よく
煮て鉢へおけ水は冷し置て

用也 魚肉久敷貯法 魚
べし

の中へ胡麻の油を火へ入し置まは
久しとぬ経ても臭いはず

煮熟くわくする物臭い

法 煮まきつらひの何
によらず明日も貯へ

置おけ時ハ大あり壺かの口いろ
まきものは蒙もの灰の乾かきまき

底そこおき其煮くつらひと碗わんよ
まきつらひをり右の灰れ上お置

壺かの口とちいされ布蒲團ふとんにて
おろひその上へ平瓦ひらゐをおりし

て風とまきまき氣きはれぬやう
にまき土用の日盛かひり一夜

越こて臭かいす板明日取出し先
鍋なべを焚か熱あつくしてそのまき

移うつして煮調べし若わきつらひ
てまきつらひ出して油断あぶらまき味

変かりて 唐納豆たうなうまの法 京きやうて
ふし 海福

寺納豆といふ土用前又交一斗
 大豆一斗麥を蒸し大豆の
 焚二品を能も合せ土用の内
 小糲み糲をせて四五日晴天に乾
 白も七搥くくも搥くく
 縮ぶるひやくけぬくくをて土
 用中は水八斗に塩二斗煮之
 して能はぬ此水も右の糲と
 まぜ少くけ入てまひのちり
 ちひの口傳あり少くづ入て
 ろくくまの合せにさうもふ
 ろくくまの加減ありさうもふ
 ろくくまの悪く是を白入とて
 けと桶入して七日置て又つく
 又七日ゆくふつれ以上七度つく
 八九月の頃まもゆるその時取
 出し七日は色黒く色付ぬふ干か
 げてはかた木の葉と上下ふた右の
 納豆とだんご程よりいほくさくさく
 べまひて上よりお世にかけるなり



